

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 逃|した魚は大きい。
- (2) 清|廉な人柄が評価された。
- (3) 希|望者に無料で頒|布する。
- (4) 焦|燥感に駆られる。
- (5) 徒|手空|拳で立ち向かう。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 計画が水泡にキ|した。
- (2) 歓声で野球場全体がメイ|ドウした。
- (3) 販売促進にシ|ョウジユンを合わせる。
- (4) あまりにタン|ペイキユウな話で対処に困る。
- (5) キシ|カイセイの策を講じる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印のついている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

中学卒業を控え、結子は、兄弟が中学卒業時にしたのと同じように、祖母や両親を招いてお茶会を主催することになった。

結子は、京都で大学に通う長男・渡を、下宿先に電話を掛けて呼び出してもらった。

渡は、めぐりめぐって、末っ子結子のお茶会の手伝いを務めることになっている。

「お兄ちゃんは、どうやってあのテーマを決めたの？ ていうか、ああいうお茶会にしようって思ったのはどうして？」

「うーん、どうしてと言われてもなあ。」

渡は電話の向こうで考えこむ。

「とにかく、あの頃自分にとっていちばん興味があったことをテーマにしたんだ。そのテーマから逆算していったらああいうお茶会になったわけで。別に奇をてらったつもりはなかったな。姿先生も面白がってくれたし。」

「ふうん。」

「ユッコが今いちばん興味があることをテーマにすればいいんじゃない？ ユッコって、子供の頃からいろいろ面白いこと考えてたじゃん。」

「そうかなあ？」

「うん。ユッコの考えることって、かなり独創的だと思うぞ。俺もユッコのお茶会、楽しみにしてるからね。」

渡は、大学に入ってから、高校時代は中断していたお茶をまた始めたらしい。茶道は彼の気質に合うようで、大学の茶道部では部長になったそうだ。

茶道って、自然の摂理と共通する何かがあるような気がする。研究のヒントになるものを思いついたりするし、実に奥深いよ。

お兄ちゃんって、結構変わった人だよなあ。

結子はそんなことを考えながら、家の近所を散歩していた。ものの見方が独特なんだよね。

そういう結子も、幼い頃から渡とは共通するものを感じていた。結子は渡のことを「お兄ちゃん」と呼び、次男・豊を「豊ちゃん」、姉・友子を「トコちゃん」と呼ぶ。豊と友子はタイプが似ていて仲もよく、そうタメ口で呼べる雰囲気がある。正直なところ、二人は友達のような感覚であり、結子が「兄すなわち年長者」と感じるのは渡だけなのである。

なにしろ、宇宙的^{*}一期一会^{いちごいちえ}、だもんね。

結子は渡のお茶会での、両親の面喰^{めんく}らった顔を思い出して、ついクッスツと笑ってしまった。

今いちばん興味があることってなんだろ。

結子は一人で散歩するのが好きだった。商店街や住宅街、私鉄の駅前や小さなお寺や神社など、例によっていろいろ観察しながら歩き回り、ぼんやり考えごとをしている時がいちばん落ち着く。

具体的に「これだ。」というものは思いつかないけれど、自分がこれまでに知らず知らずのうちに達成したいと思ってきたもの、自分が心地よく感じる行動というものがあるような気はしていた。

あれはなんだろう。あれを一言で表せるような言葉があるだろうか。

すぐそこにあるような気がするが、もやもやしていてなかなか浮かばない。

その時、不意に、とある言葉が目飛び込んできた。

結子は目をぱちくりさせ、思わず足を止めてしまった。

お寺の前の、日常的に通る過ぎる掲示板。

そこにその文字はあった。

もしかして、こういうことかも。

結子はじつとその文字を見つめ、声に出さずに何度もその言葉を繰り返

した。

結子のお茶会の日がやってきた。

「お兄ちゃん、今日はよろしくお願ひします。」

「任せとけ。」

渡と結子は、前日に姿先生と一緒に前点の予習をしていた。

「ユッコのテーマ、面白い。さすがユッコだね。」

前日にテーマを説明すると、渡はなぜかとても嬉しそうな顔をした。

江戸と浪速の祖父母が到着した。

友子のお茶会から既に三年、渡のお茶会からはもはや六年が経っている。

そのことを意識したのか、どちらの祖母も、渡の時と同じ桜の着物で現われた。さすがに六年の歳月は大きく、おばあちゃんたちも歳を取ったなあ、と結子は思った。

「ご無沙汰です、お変わりなく、結子ちゃんが中学卒業やなんて、わてらも老けるわけですなあ、と労わりに満ちたやり取りが交わされている。

和やかに茶室に入ってきた一同は、床の間に目を吸い寄せられた。

そこに掛け軸代わりに掛かっているのは、半畳ほどの大きさの、幾何学模様の織り込まれた赤い絨毯である。

あれ、絨毯ちゃうか？

絨毯やな。

健造と玉枝が呟く。

喜一郎と美登利は、怪訝そうな顔になった。

見覚えがあるなあ。どこで見たんだろう。

あつ、うちの店だわ。

美登利が声を上げた。

あれ、うちの店の、電話台の下に敷いてあった絨毯じゃないの。

道理で見たことがあったわけだ。

二人は顔を見合わせた。

床の間に置いたガラスの花器に活けられているのは、赤いチューリップの花である。

ひととおり驚きの声が収まってから皆が着席し、静かにお茶会が始まった。

お菓子は、カステラ。

使った茶碗は、高麗の三島手茶碗と、紅安南茶碗。

流れるように次々とお茶碗が差し出され（さすが、渡のフォローは完璧である）、「けっこうなお点前でした。」の音が響く。

みんなが早く結子の説明を聞きたくてうずうずしていることが窺えた。

「本日は、お越しいただきましてどうもありがとうございます。」

結子が深々と頭を下げると、皆もお辞儀を返した。

「今日のお茶会のテーマは。」

結子はそこちよつと間を置いた。皆が身を乗り出すのを確認してから、宣言する。

「融通無碍、です。」

一瞬、聞き取れなかったのか、皆の顔に「？」が浮かんだような気がしたので、結子は慌てて付け加えた。

「融通が利く、利かないの融通に、無碍——はちよつと難しい字ですけど、元々は仏教用語で、この世のすべてのものは、互いに繋がっていて影響しあっている。そういう意味だそうです。」

そう、結子がお寺の掲示板で見たのは、季節の折々に張り出されている仏教用語で、あの時書かれていて目に飛び込んできたのが「融通無碍」だったのだ。

「でも、私はもつと単純に、文字通りの意味での融通無碍、をテーマにしました。」

渡が水屋から部屋に戻ってきて、昨日も聞いた結子の話をじつと聞いて

いる。

「融通、は滞らずに通ること。無碍、は妨げられないこと。」

結子はそう続け、床の間に目をやった。

「あれはベルシヤ絨毯です。今のイランですね。遥か昔から日本にも運ばれてきていて、祇園祭の山鉾にも使われているくらいですし、今ではどこの家でも見られるものになりました。チューリップはトルコ原産。もちろん、今は普通にどこのお花屋さんでも手に入ります。ガラスだって、元々は中東からやってきた文物で、かつては大変な貴重品でした。」

続いてお茶碗に目をやる。

「高麗茶碗は朝鮮半島からやってきたものですし、安南焼はベトナム。そもそも、お茶そのものが中国からの由来です。カステラはポルトガルから日本に入ってきて、ポルトガル語は普段使う日本語にたくさん残っています。」

結子は皆を見回した。

「つまり、古来世界中を行き来したものが、今、当たり前前の風景になっているということです。」

結子は、ほんの少し頭をかしげた。

「うまく言えないけど、私はそういう、当たり前前でちょうどいい、っていう世界を造る手伝いをしたいなあ、と思います。」

そう言いながらも、結子はたぶん、そういうことだ、と思った。

たぶんあたしはそういうことがしたいんだ。

「今後とも、皆様のご指導をよろしくお願いいたします。重ねて、本日はどうもありがとうございました。」

再び頭を下げると、割れんばかりの拍手が湧いた。

(3) 玉枝は、眩しいような目をして孫娘を見つつ、眩いた。

融通無碍。ええ言葉やな。

そやな、カネも商いも、融通無碍が理想やな。

健造も頷く。

なんか、この子は面白いことやってくれそうやな。

玉枝はそんなことを考えていた。

商売でもいけるけど、商売にとどまらない、えらいおつきいこと、やりそうや。

「ユッコ、面白かった。」

「ユッコらしいって思っちゃった。」

(4) 「ユッコがあんな雄大なこと考えてたなんて。」

「ビックリだよねえ。」

豊と友子が興奮して口々に声を掛けると、結子も真顔で大きく頷いた。

「あたしもびっくりしちゃった。あたし、あんなこと考えてたんだなんて。」

「何それ。」

「やっぱ面白いや、ユッコ。」

笑い転げる二人を尻目に、結子と渡は片付けを始めた。皆はひと足早く、このあとの宴会会場である「志のだ」に向かっている。

「あたしたちも先に行ってるね。」

豊と友子も腰を浮かせる。

「うん。赤坂に絨毯とお茶碗返したら追いかける。」

「俺が絨毯持つよ。」

「ありがとう。」

丸めた絨毯を抱えたのっぽの渡と、茶碗を抱えた小柄な結子は並んで歩き始めた。

「ホント、ユッコらしいテーマだね。融通無碍。いいなあ。きつと、ユッコはそういう人生を送るよ。」

「そうかなあ。」

結子は自分で言っておきながらも、まだ半信半疑であった。

融通無碍。滞らずにものごとが行き来し、何物にも妨げられない。

ともあれ、この時の人生の所信表明が、意識するしないにかかわらず、その後の彼女の指針になっていくのである。

(恩田陸「なんとかしなくちゃ。青雲編」による)

〔注〕 宇宙的じちこいちえ一期一会——渡がお茶会を主催した時のテーマ。

浪速なにわ——大阪市付近の古称。

水屋——茶器を洗うための場所。

祇園祭ぎおん——京都八坂神社の祭礼。

山鉾やまほこ——山車の一種。

〔問1〕⁽¹⁾ 前日にテーマを説明すると、渡はなぜかとても嬉しうれそうな顔をした。とあるが、なぜ渡はこのような顔をしたのか。その理由として

最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 妹の結子が自分を頼りにしていることを感じ、兄として力になれることが嬉しかったから。

イ 渡の期待していた通り、結子が彼女らしい創意にあふれたテーマにしたと分かったから。

ウ 渡の助言を踏まえて結子が設定したテーマを姿先生にほめられ、兄として鼻が高かったから。

エ 自分が茶道に感じている自然の摂理との共通性を、結子も同じように感じていることが分かったから。

〔問2〕⁽²⁾ 二人は顔を見合わせた。とあるが、このときの喜一郎と美登利の心情を五十字以内で書け。

〔問3〕 玉枝は、眩まぶしいような目をして孫娘を見つつ、眩まぶいた。とあるが、

このときの玉枝の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 堂々とした結子の説明を聞いて、彼女がその言葉通り世界を舞台に活躍するだろうと予感し、感動している様子。

イ お茶会のテーマを通し、自分のこれからの生き方について自信を持って宣言する結子に成長を感じ満足する様子。

ウ 説明を聞いて、結子が今後、自分たちの枠ではとらえきれないような生き方をしていくだろうと期待する様子。

エ 結子の融通無碍というテーマを聞き、商売をする上でもそれが理想であると改めて納得し、感心している様子。

〔問4〕⁽⁴⁾「ユッコがあんな雄大なこと考えてたなんて。」とあるが、このとき

の豊の心情として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 世界中から集まった様々な物に支えられて今の便利な生活があり、こうした豊かで暮らしやすい社会が続くように尽力したいという結子の決意に感動する気持ち。

イ 仏教の融通無碍に表された、この世のすべてのものは互いに繋がり影響し合っているということ、お茶会のテーマにしようとした結子の壮大な計画に驚嘆する気持ち。

ウ 日々の生活の中に当たり前に存在する一つ一つのものには、国境を越えて流通させようとした人類の努力の長い歴史があるのだ、という結子の鋭い指摘に感心する気持ち。

エ 古来世界中を行き来したものが、今では当たり前の風景になっていると気づき、そのような世界を作る手伝いをしたいという結子の発想に感嘆する気持ち。

〔問5〕 本文の表現を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 登場人物の発言と心中で思ったこととを、「」の有無によって書き分けることで、読者の感情移入を促している。

イ 東京と大阪の言葉遣いを分けることで、登場人物の人物柄やものの考え方に違いがあることを暗示している。

ウ 作者が物語の全てを知る語り手として直接語る部分を挿入することで、読者に物語の枠組みを示している。

エ 指示語を多用することによって、登場人物の考えが二転三転し、曖昧なものになっていることを表現している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

もともと日本では家を仕立てることは、建造物よりもテリトリーを画定することであった。このことは、時を経たいまにいたるも私たちの空間への定着法に潜在して、部屋の曖昧さを物語っている。空間にあらわれる文化の差異、つまり価値の体系の差異を研究したT・E・ホールは日本人は部屋の中央を使い、西洋人は周辺に家具を配置するというが、この観察は正しい。境界は觀念としては存在するが、われわれは部屋を境界線にそって構成しない。われわれは部屋の中心を使い、中心からひろがる周辺はぼやけている。パシユラールにならうていえば、われわれの「家」の胚種は、片隅の空間にはなく、われわれの身振り（しぐさ）のなかにひそんでいるといえよう。座敷が対面の儀礼にそつてうまれ、茶室が作法と結びついているのはひとつの例のように見えるのである。輪郭のない場所を儀礼的＝象徴的身体が使いこなすときに、それを基盤に外面的な空間としての「家」が浮上する。日本の空間は使用だけが規定する、といつてもよからう。使用とは別のいい方をすれば「出来事」である。われわれにとつて空間とは出来事から生じるのである。

日本の家には実体的な強さはなく、実体の視点からみれば空虚である。それが無意味ではなく、逆に意味に浸透されている例をわれわれの日常生活のなかから拾い出すことは容易である。たとえば——ある家を訪れると先客がいる、その先客はあとからやつてきた私に、いままで自分の坐つていた座布団を裏返して差出し、自分は畳にすべりおる——このようなしぐさはいろいろな場合に経験する。この操作でいままでかれに敷かれていた経過は消滅し、座布団は新しい物になった。裏返しは自分の体温の移つていない面を出すという生理的な配慮以上に象徴的なしぐさなのである。この所作は、お互いの了解するところであるから、すでに文化的な

コード（慣習）というべきであろう。

たしかに客に新しい座布団を提供することは礼儀にかなつたことかもしれない。ある民族では、人の住んでいた「家」に引越して住むことは到底考えられない屈辱で、移住に際して自分の「家」を新しく建てるというほどである。それほどなくても新しい物をおろすことは、日本人の生活のひとつのけじめである。⁽¹⁾しかしここで問題になるのは、実際に新しくするのはなく裏返すと事情が一変するという現象である。実体は連続して存在しているが意味の上ではこの連続が断ち切れている。物は実体として存在するだけでなく、意味の次元に存在していることがにわかには明らかになる。われわれはこの両方の次元において物を理解するが、重要なのはむしろ意味である。いまの場合、意味の次元はしぐさによつて構成されている。このしぐさは後につづく行為の場面全体を変えただから、「家」はつねに象徴的なしぐさによつて様相を変えているといつてよいわけである。さきに来事とよんだのはこのような意味に染まった身振り（パフォーマンス）である。おそらくそこから身体の記号論がうかんでくるし、そのような記号論のなりたつ場として、家の演劇的な理解がひらけてくるように思う。たしかにこの種の象徴の働きは、人類にとつて共通のものである。しかし、そのなかにも差異がある。⁽²⁾西洋の建築は「空間」が象徴化する。中心性のある教会のドームを挙げるまでもないだろう。はるかに地上的な口ココの、一枚の布を空に抛りあげたような天井におおわれた部屋の場合でも、空間という概念で語るべき世界である。それらは物質と物質でないものが対比される二元論的構造にもとづいている。これに対してどうやら私たちはこの対立のあいだに生じる不確かで曖昧な領域にいる。客観的なものから主観的なものへ、またその逆といった二元的な対立のあいだをどびかうのではなく、本来この対立に生じた、そしてどんなに二元論的である人間もそれを意識しはじめれば免れない不確かさのなかに、われわれは最初にはいりこんでいる。対立を厳密にしないのではなく、この曖昧さを

むしろ本質的な世界として、逆に私と外の世界をそのなかで分節している可変的關係として見出ししている（この彼我の關係についてはもう少し立ち入ってあとで考えよう）。

もちろん、実際に物質的な生活がないわけではない。だが、そこでは実在感の稀薄化が生じていることはまちがいない。稀薄化は、物があらわれたり、消えたりする扱いのなかでもっとも促進される。われわれの小さな家での生活では中央に机をおいて客と相対する部屋は、夜になると机をとりはらい布団を敷いて寢室にもなる。部屋に机を出し、あるいは布団をあげおろしする操作は、その都度、別の機能をもった室内をつくりだすわけである。これは空間が狭いからだけではない。空間と物の結びつきは全く一時的な現象であり、いつでも消去できる性格をもっていることを示しているのである。おそらく、これは日本だけのことではない、という反論はあろう。事実、西洋の中世はほとんど一室空間で、そのため、固定した家具は少なかった。テーブルがもっとも典型的で、それは長く仮設的なものとどまった。だがこれは象徴的な關係よりも、空間の欠乏が最大の原因だった。このような場合と日本との差を考えるには、床の差異を考慮しなければなるまい。

それはともかく、日本の場合には、部屋の機能変化は、そこに出現する机とか布団とかいう物象徴によって生じる。あらわれる道具がちがえば、そこに生じる出来事はちがってくる。床の間の掛け物は、季節やその部屋で行なわれる行事によって変わる。こうして私たちは物の象徴性と機能性のあいだに厳密な区別をたてにくいのを感じないわけにはいかない。物の性格がそうであるから、日本の家は出来事（使用）の空間であるが、それはまた使用される物の側からも同様に規定できる。日本の家では、物も一時的にあらわれ、必要なあいだ滞留し、やがて姿を消す。上田篤氏が⁽³⁾日本と西洋の家のなかでの物のあらわれ方を区別して、前者を劇場型、後者を博物館型と名づけたのもいま述べてきたことに符合する分類である。

しかし劇場型といっても、物があらかじめ用意された舞台上に役者として登場するのではなく、物の登場が空間のはじまりであることを忘れてはならない。物に、こころがある、という日本伝来の考え方はアニミズムというよりは、こうした物のふるまい、物とのつきあいから生じてくるのではなからうか。それは物がノエマ的でなくノエシス的にとらえられるからである。日常の道具は調度とよばれるが、それは部屋をしつらうものである。部屋にしつらわれる物は、また部屋を構えるものである。もういちど、『方丈記』のつづき、室内の調度の描写を引用することは無駄ではない。

今、日野山の奥に跡を隠してのち、東に三尺余りの庇をさして、柴折りくぶるよすがとす。南、竹の簀子を敷き、その西に關伽柵を作り、北によせて、障子をへだてて阿弥佗の絵像を安置し、そばに普賢をかき、前に法花経を置けり。東の際に蕨のほころを敷きて、夜の床とす。西南に竹のつり棚を構へて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち、和歌・管絃・往生要集こときの抄物をいれたり。かたわらに、琴、琵琶、おの／＼一張を立つ。いはゆる折琴・繼琵琶これ也。

部屋のなかに持ちもの全部がならべられている。それは一室しかないということによる。しかし、⁽⁴⁾それらは庵という架構よりもはるかに生き生きした映像である。それが部屋をうみだすのだ。かれの心があるときには宗教に、あるときには楽器にたわむれるであろうさまが、ひとつひとつの物によって感じられる。これらはその場所からとりだされ、かれの手にとられ、出来事となって現象する。空間はそこに生じる。

この空間感覚はわれわれの身体にも言語にも刻まれているようである。どこにも上昇していかず、どこにも沈下しない奇妙な現実性が、同時にひとつとも実体を欠いた空虚な世界である。実体的世界ではなく象徴が、しかもひとつひとつ区切れた語（物）のようではなく、ひとつつながりの、幾分

長い叙述のような出来事を単位としてあらわれ、とびかうのである。それがテキストを構成する。物が客観的に対象化されてしまうというよりも、物はそれが属する劇的な場面全体にかかわって存在する。^{*}ハイデガーは、われわれが「最も身近に出会う」のは、たんなる幾何学的空間ではなくて「住み道具」としての部屋であり、この住み道具から一定の方向づけがあらわれ、そのなかに「ときに応じて〈個々の道具〉があらわれる」と述べている。それは、ハイデガーの現象学的空間の生成を意味するのであるが、むしろわれわれの場合には、個々の道具のあらわれとともに住み道具としての部屋があらわれると言い換えた方がよからう。

物自体が実体的というよりも出来事のように経過する性格をもつ結果、日本の調度はいったいに軽量で持ち運びが可能なスケールをもつようになる。座布団は手で裏返せるが、椅子にはそういう取扱いはできない。西洋では中世の終わりからルネッサンスになると、もはやテーブルやカップボードなどの家具はほとんど動かすことができなほど重くなる。西洋人の眼からみれば、日本の調度は嘘のように軽く小さく見えるにちがいない。

(多木浩二「生きられた家」による)

〔注〕 テリトリー——領域。

T・E・ホール——アメリカの文化人類学者。

バシユラル——フランスの哲学者。

胚種——植物の種子のもとになる部分。

記号論——様々な記号の機能についての哲学理論。

ロココ——フランスから始まった美術様式の一つ。

二元論——世界や事物を、相反する二つの要素に区分して捉えようとする考え方。

上田篤——建築家。

アニミズム——全てのものの中に靈魂が宿るとする考え方。

ノエマ——精神的に知覚されたもの、「考えられたもの」を指す。

ノエシス——「考える作用」を指す。

もういちど——本文より前の部分で『方丈記』が引用されている。

三尺余り——一尺は約三十センチメートル。

閑伽棚——仏前に供える水や花を置く棚。

阿弥佗——阿弥陀如来のこと。

普賢——普賢菩薩のこと。

法花経——仏教の経典の一種。

蕨のほとろ——伸びすぎた蕨(山菜の一種)。

往生要集——平安時代中期の仏教書。

抄物——原典をわかりやすくまとめた書籍。

ハイデガー——ドイツの哲学者。

ルネッサンス——ヨーロッパに興った文化運動。

カップボード——扉のついた食器棚。

〔問1〕⁽¹⁾ しかしここで問題になるのは、実際に新しくするのはなく裏返す事象が一変するという現象である。とあるが、「実際に新しくするのはなく裏返す事象が一変する」のはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 先客が座布団を裏返して新たな客に差し出すことが、主人との面会の順番を次に引き継ぐ合図となっているから。

イ 事前に座布団を裏返すことで、他の人が使っていたという事実が帳消しになり、新しい座布団として双方に認識されるから。

ウ 新しい座布団を用意しなくても、生活の知恵として、裏返せば座布団の清潔な面を提供できると了解しているから。

エ 実体としての座布団は変わらないが、それを裏返すことで、来客用の座布団という価値が新たに付加されるから。

〔問2〕⁽²⁾ 西洋の建築は「空間」が象徴化する。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 西洋の建築は、建造物を作り出す物質的な空間によって、その建造物固有の意味や目的を表しているということ。

イ 西洋の建築は、客観的なものと主観的なものが一つの空間に混在するため、空間の意味が曖昧なものになっているということ。

ウ 西洋の建築において、非物質である「空間」は物質である調度と異なり、抽象的なものに過ぎないとされること。

エ 西洋の建築において、広い空間を備えた建造物が、その地域一帯のシンボルとして人々に認識されるということ。

〔問3〕⁽³⁾ 日本と西洋の家のなかでの物のあらわれ方を区別して、前者を劇場型、後者を博物館型と名づけたのもいま述べてきたことに符合する分類である。とあるが、「劇場型」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 日本の家では、その空間の機能に合った大きな道具を固定して配置し、小さな道具は必要に応じて取り出して用いるということ。

イ 日本では物にも心があると考えられており、家においても物が空間の主役になるようにしつらえられているということ。

ウ 舞台が役者の演技に応じた道具で作られるように、日本の家も部屋の機能に応じた物によって空間が作られるということ。

エ 日本の家では、その時々が必要に応じて使う道具が出し入れされ、その道具によって空間としての機能が変わるということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ それらは庵いおりという架構よりもはるかに生き生きとした映像である。とあるが、このように言えるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 庵という簡素な構造物においては、一つ一つの調度が関係し合うことで、室内全体の物の配置を客観的に対象化できるから。

イ 庵という簡素な構造物ではなく、一つ一つの調度によって、それらを使う鴨長明の生活がありありと思ひ浮かべられるから。

ウ 庵自体は簡素な構造物であるが、そこに並ぶ沢山の調度によって、鴨長明の経済的には恵まれていた生活の様子が想像できるから。

エ 庵という簡素な構造物を住居としたという事実よりも、一つ一つの調度の方が鴨長明の人柄を生き生きと物語っているから。

〔問5〕 この文章で筆者は、日本と西洋の文化の差異について述べている。

あなたが感じるそのような文化の差異について、本文以外の具体的な例を挙げ、それぞれの特徴と差異が生まれた理由として考えられることを、二百四十字以内で書け。なお、や。や。「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

＊川柳は「笑い」と密接な関係にある文芸である、という説明に対しては、読者の皆さんの多くが納得して下さると思う。ところが、俳句も、また「笑い」と大変密接な関係にある文芸である、という説明に対しては、多くの方々がどこか釈然としないものを覚えられるのではなからうか。

そこで、まずは、俳句のルーツである俳諧の発句が、「笑い」の文芸であったことを明らかにしておくことにしたい。前にも記しておいたように、俳諧の発句の前に連歌の発句がある。その連歌の発句と俳諧の発句の違いは、どこにあったのであろうか。具体的なサンプルを一つ示してみよう。

(1) さみだれは晴てもにごる川べかな

五月雨は大海知や井の蛙

＊紹巴
＊貞徳

紹巴は、先に『連歌至宝抄』によってその発句論に注目した連歌師である。その紹巴とも交流のあった貞徳は、芭蕉登場以前の江戸俳諧の開拓者、貞門俳諧のリーダーである。そして、紹巴の作品が連歌の発句、貞徳の作品が俳諧の発句である。両句とも「五月雨」、すなわち梅雨をテーマにしている。鬱陶しく降り続く長雨である。両句の大きな違いはどこにあるのであろうか。

俳諧の発句の作者貞徳が慶安四年(一六五二)に刊行している『俳諧御傘』という本を繙くと、左のような記述が見えて、大きなヒントを与えてくれる。

抑はじめは誹諧と連歌のわいだめ(区別)なし。其中よりやさしき詞のみをつづけて連歌といひ、俗言を嫌はず作する句を誹諧といふなり。

——そもそも、本来的には俳諧と連歌との形式的な区別はない。美しい歌語だけで作ったものを連歌といい、俗語も平気で使って作ったものを俳諧というのである。

そもそもは、連歌の余興として俳諧(の連歌)という文芸が興ったのであった。それゆえに、先の紹巴の連歌論書である『連歌至宝抄』における発句論においても「俳諧も同前」と、俳諧に対しての目配りがなされていたのである。そんな俳諧文芸発生時には、連歌と俳諧の区別が曖昧だったというのである。俳諧文芸の発生は、室町時代末期である。

それが、江戸時代となったところで、本格的に俳諧とかわることとなった貞徳は、連歌と俳諧の違いを、それぞれの文芸が用いる言葉によって明らかにしたのであった。すなわち、「やさしき詞」だけで作られるのが連歌であり、「俗言」をも取り込んで作られるのが俳諧だとの考えである。「俗言」は、当時、「俳言」とも言われた。俗語、漢語、俚諺等、和歌や連歌では、用いられなかった言葉である。

それでは、先の紹巴の連歌の発句と、貞徳の俳諧の発句はどうであらうか。まず、紹巴の句であるが、五月雨のシーズンには、たとえ一時的に雨が上ったとしても、川の近辺にできた水溜りは濁っている、との句意である。五月雨の頃の川辺の様子を「やさしき詞」だけで素直に詠んだ作品である(それだけにあまり面白くはない)。

対する貞徳の句である。一読、一句が俚諺「井の中の蛙大海を知らず」(自分の見聞の狭さを自覚しないで、得々とふるまうことのとえ)を取り込んでの句作りであることが理解し得よう。「俗言」「俳言」による句作りである。そして、これによって、一句は庶民性を獲得しているのである。

一句の意味は、人々を鬱陶しくさせる梅雨の長雨ではあるが、それによって井戸の水は溢れ、蛙(見聞の狭い人間)は、大海を知ることになる、というのである。五月雨を契機として、俚諺の内容を逆転させたところに一

句の「笑い」がある。

(2) 俳諧の発句は、このように庶民性と滑稽性をその特色とする文芸であった。貞徳は、先の『俳諧御傘』の中に左のようにも記している。

俳諧は、面白事おもしろきことある時、興に乗じていひ出し、人をもよろこばしめ、我もたのしむ道なれば、おさまれる世のこゑとは是これをいふべき也なり。

——俳諧は、面白いことがある時、その興のままに詠んで、人をよろこばせ、自分自身も楽しむものなので、これを治世の声と呼んだらよいであろう。

俳諧が「笑い」の文芸であることが明言されているのである。俳諧がもたらす「笑い」によって、作者も、読者も、ともに「よろこび」「たのしむ」のだというのである。「笑い」は、人々の心をなごませるのである。

貞徳がリーダーとして活躍した江戸時代初期の貞門俳諧と、芭蕉が（古池や）の句を作って本格的に蕉風俳諧を確立した、その間にあって、何とか貞門の古風から脱皮しようとして、あらゆる新奇さを多様に追求したグループに、宗因そくいんをリーダーとする談林俳諧があった。そして、その談林俳諧の中心人物の一人に惟中いぢゆうがいた。その惟中が、延宝三年（一六七五）に出版した俳論書『俳諧蒙求』の中には、左のような記述が見える。

俳諧といふは、たはぶれたること葉の、ひやうふつと口よりながれ出て、人の耳をよろこばしめ、人をしてかたり、わらはしむるのこゝろをいふなり。

——俳諧というのは、遊び半分の言葉が口を衝いて「ひやうふつ」と口から流れ出て、それが人の耳をよろこばせ、人を談笑いざなに誘う——そんな意味があるのである。

ひたすら新奇を追求した談林俳諧においても、「笑い」が俳諧の重要な要素であったことが明かされているのである。即興的に詠まれた俳諧作品の「笑い」によって、人々の心はなごみ、談笑の輪が広がるというのである。

「さび」の美を志向し、従来の俳諧文芸を百八十度変えてしまった芭蕉にあっても、なお、「笑い」は、俳諧の重要な要素として認識、保持されていたのである。門人の去来ききよは、宝永元年（一七〇四）頃成立したと考えられている俳論書『去来抄』に、左のごときエピソードを伝えている。

夕涼み疝氣せんきおこしてかへりけり 去来

予が初学の時、ほ句の仕やうを窺うかがひけるに、先師曰いはく、ほ句は句つよく、俳意たしかに作すべし、と也なり。こゝろ見に此句このを賦ふして窺うかがひぬれば、又是これにてもなし、と大笑し給ひけり。

——私が俳諧をはじめて間もないころ、芭蕉先生に発句の作り方をお尋ねしたところ、先生が言われますには、発句はインパクトがあるように、そして「俳諧性」を明確に打ち出して作るようにということでした。そこで私は、ためにしに（夕涼み）の句を作ってお見せしたところ、このような作品ともちがうのだ、と大笑いなさったことでした。

「俳意」とは、俳諧性（庶民性・滑稽性）のことである。芭蕉も、また、初心者が発句における「笑い」の大切さをしつかりと教えていたのである。もつとも、去来が、「夕涼みをしていたら、涼み過ぎたのか、疝氣(4)（発作性の腹痛、疼痛。寒冷によって症状が悪化する）の発作に見舞われ、ほうほうの体ていで家に帰ってきた」との意味の（夕涼み疝氣おこしてかへりけり）の発句を詠んで芭蕉に示したところが、「又是にてもなし」と大笑いをしたというのであるから、芭蕉が求めていた「笑い」が、この手のあ

からさまざまな、品しな下くだる「笑い」でなかったことは明らかである。⁽⁵⁾ 貞門俳諧
や談林俳諧が求めた「笑い」とは別種の「笑い」である。芭蕉自身は、元
禄六年（一六九三）に書いた「許六離別の詞ことば」なる文章の中で、

たゞ 釈阿しやくあ（藤原俊成）・西行さいぎやうのことばのみ、かりそめに云いちらされし
あだなるたはぶれごと、あはれなる所多し。

——藤原俊成、そして西行の和歌だけは、ほんの口ずさんだような滑
稽の作品であつても、そこには「あわれ」の情が濃厚に漂ひらっている。

と記している。とすれば、芭蕉が求めた「笑い」とは、一句の中で「あ
はれ」と融合し、瀾漫らんまんした「笑い」（「たはぶれごと」）であつたのかもしれない。

（復本一郎「俳句と川柳「笑い」と「切れ」の考え方、たのしみ方」

（一部改変）による）

〔注〕川柳——俳諧から派生した五七五の韻律の詩。季語など作句の制約

が俳句よりも少ない。

俳諧——俳諧連歌の略称だったが、上の句（五七五）の部分が「発
句」として独立したものを指すようになった。

前にも記しておいたように——本文より前の部分で同様の解説がさ
れている。

連歌——和歌の上の句（五七五）と下の句（七七）を別の人が読み
連ねていく文芸。

紹巴じょうは——里村紹巴。室町・安土桃山時代の連歌師。

貞徳ていとく——松永貞徳。江戸初期の俳人、歌人。

俚諺りげん——世間に言い伝えられてきたことわざ。

宗因そういん——西山宗因。江戸前期の連歌師、俳人。

惟中いちゆう——岡西惟中。江戸前期の俳人。

去来きらい——向井去来。江戸前期の俳人。

許六きよろく——森川許六。江戸前・中期の俳人。

釈阿しやくあ（藤原俊成）——平安末・鎌倉初期の歌人。

西行さいぎやう——平安末期・鎌倉初期の歌人、僧。

瀾漫らんまん——広がりはびこること。

〔問1〕⁽¹⁾ さみだれは晴はらてもにぐる川べかなとあるが、筆者はこの発句をどのように評価しているか。最も適切なものを次のうちから選べ。

- ア 美しい言葉を使つて素直に表現しているが、面白みに欠ける。
- イ 易しい言葉で分かりやすく表現している分、情趣が足りない。
- ウ 俗語を排除して教訓的な内容を表現している分、面白くない。
- エ 優雅な歌語を用いて表現している分、難解な歌になっている。

〔問2〕⁽²⁾ 俳諧の発句は、このように庶民性と滑稽性をその特色とする文芸であつた。とあるが、貞徳の句における庶民性と滑稽性とはどうい

うことか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 慣用的な表現を下敷きとして、新しい切り口からとらえ直すことで笑いを催しているということ。

イ 歌では扱われない言葉をあえて句に用いることで、表現の新鮮さに読者の興味を引いているということ。

ウ 庶民がなじんできた連歌の伝統を踏まえながら、常識を裏切るような内容で読者を驚かせているということ。

エ 庶民の暮らしに題材を採ることで、「やさしき詞」を用いながら身近な笑いを表現しているということ。

〔問3〕⁽³⁾ 即興的に詠まれた俳諧作品とあるが、「即興的に詠まれた」とはどのような様子か。それにあたる表現を、の中から十五字以内で抜き出せ。

〔問4〕⁽⁴⁾ ほうほうの体たゝまでのここでの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

- ア 恥ずかしさにさいなまれて
- イ 様々な手を尽くして
- ウ ひどく後悔して
- エ やつとのこと

〔問5〕⁽⁵⁾ 貞門俳諧や談林俳諧が求めた「笑い」とは別種の「笑い」である。とあるが、「別種の『笑い』」とはどのようなものか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 庶民の生活に根ざしながら、多少品のない表現であっても、新奇さを多様に追求しているもの。

イ 日常の生活の中にあるおかしさではあるが、古人が和歌に詠み込んだ花鳥風月を取り入れているもの。

ウ 笑いを誘うおかしさの中に、しみじみと身にしみて感じられるような風情が含まれているもの。

エ 古人と同様に面白いことをインパクトのある言葉で詠み、自分も読者も楽しもうとするもの。